



野鳥の 不思議解明 最前線 #103 文 植田睦之

© Japan Bird Research Association, 2014

抱卵するバン。バンも共同繁殖している可能性があるようですが、彼らにもセイケイのような駆け引きがある？ 撮影●内田博

雄の無言の圧力で雌同士が仲良してる？

～ セイケイの雌が共同巣で繁殖する理由 ～

5月になり、さえずりが賑やかになってきました。留鳥たちはもう子育てを開始しています。繁殖の早いエナガはすでに巣立ちビナを連れていきますし、シジュウカラやヤマガラもイモムシをくわえて巣に運んでいます。

日本で繁殖しているこうした鳥の多くは一夫一妻のつがい繁殖します。しかしセッカのような一夫多妻、タマシギのような一妻多夫で繁殖する鳥もいますし、海外には複数個体で1つの巣を利用して繁殖する共同巣というしくみを持つ鳥もいます。今回紹介するニュージーランドに生息するクイナの仲間のセイケイ *Porphyrio melanotus* もその1つです。セイケイは普通に一夫一妻でも繁殖しますが、複数の雌が1つの巣を利用して、繁殖することもよくあります。このシステムは、雄にとっては1羽の雌とつがうよりも多くのヒナを育てられるメリットがあります。しかし、雌側にとって、特に雌の中でも1番強い「第1雌」にとっては不利なシステムです。卵がたくさんあることで割れてしまったり、抱卵できる数の限界があるので、ふ化しない卵がでてきて、自分の子の数が少なくなってしまうからです。そのため、同様の繁殖システムを持つ別の種では第1雌が劣位個体の卵を捨てたりすることがよくあります。しかしセイケイではそういうことが観察されていません。なぜでしょうか？

Deyさんたちは、こうした「卵捨て」が起きた場合にどうなるのかを実験的に確かめました。セイケ

イの共同巣から人為的に卵を抜き取ると、雄は抱卵などの手伝いを減らしたり、また巣を放棄してしまうこともあることがわかりました。つまり、第1雌が自分の卵をたくさんふ化させるために劣位の雌の卵を捨てると、雄の繁殖への手伝いがなくなってしまいう可能性が出てきます。そうすると、逆に自分にとってマイナスになってしまうかもしれません。Deyさんたちはこうした雄の「いなくなってしまうかもしれない」という圧力が、複数の雌が共同して繁殖することに寄与しているのではないかと考えています。彼らの別の研究では第1雌の卵の方が劣位の雌よりも早くふ化して、早くふ化したヒナの方が生存率が高く、また成鳥になった時に優位な鳥になる可能性が高いことがわかっています。このメリットもあわせると多少ふ化率が悪くても第1雌は共同巣で繁殖するのもかもしれませんね。

でも、「卵捨て」をするほかの種ではどうなのでしょう？ 卵が減っても雄は引き続き繁殖に協力するのでしょうか？ 今後のそうした種間比較の研究に期待したいと思います。

紹介した論文

Day, C.J., O'connor, C.M. Blishine, S. & Quinn J.M. (2014) Cooperative male reduce incubation in response to cues of female-female competition. *Ibis* 156: 446-451.

Day, C.J., O'connor, C.M. & Quinn J.M. (in press) Hatching order affects offspring growth, survival and adult dominance in the joint-laying Pukeko *Porphyrio melanotus melanotus*. *Ibis* doi: 10.1111/ibi.12158.